

先輩が育てた楮も使用

県立小川高校定時制の生徒が地元の紙すき工房を訪れ、和紙の手すき体験をした。同校定時制は実体験を通じた活動と環境教育に力を注いでいる。工房では和紙の産地小川の高校生なら一度は和紙をすきたいとの声も聞かれた。

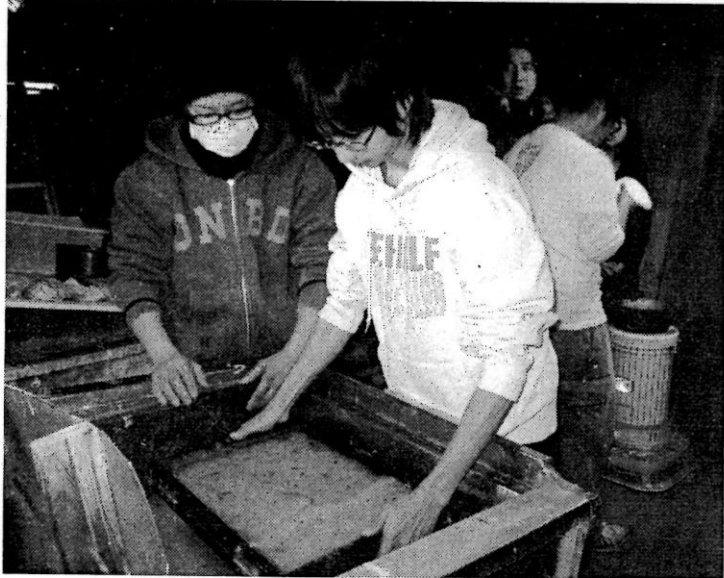
紙すき体験は、生徒に豊かな社会経験を積んでもらおうと恒例になっている。今年も1年生12人が環境基礎の授業の一環に小川町の和紙職人、久保孝正さん(31)方を訪問。和紙の原料となる楮(こうぞ)の一部は昨年、当時の同校定時制1年生が町内に定植した楮が使われた。

生徒たちは久保さんから紙すきの方法について説明を受けた後、作業に入り、腕や腰を使いながら器用にすいていた。

体験した佐藤純さん(16)は「和紙といえは習字紙や障子紙が思い浮かぶ。いざ

自分で試してみると難しい半面、面白さもあった」と話した。地元の町立西中学校を卒業した内田和秀さん(16)は「中学の卒業証書は自分で書いた和紙でした」と、誇らしげに語った。

同行の教諭は「紙が自然の木からできることを知らない生徒もいる。現地で体験を積み、環境教育に結びつけていきたい」と話していた。(関根義浩)



紙すきを体験する生徒―小川町小川

小川高定時制生徒が紙すき体験